

異文化コミュニケーション教育としてのステレオタイプ研究

——体験学習アプローチ——

浅井 亜紀子

Teaching Stereotypes in Intercultural Communication Program: Experiential Approach

Akiko ASAI

要約

近年英語教育の中で異文化理解のための学習が必要とされてきており、大学の英語教育の中でも異文化コミュニケーション学習の導入がなされてきている。英語を読む、書く、話す、聞くの能力に加え、異文化を理解する能力、即ち、自文化至上主義に陥らず相手文化の価値観を理解し認めようとする態度の育成、相手文化の背景を理解した上での言葉の運用能力の育成である。本研究ではまず大学における異文化教育に焦点をあてた語学教育の問題点を示し、体験学習と認識学習を体系的に用いながら異文化理解を促す授業を提案する。異文化理解の重要なテーマである「ステレオタイプ」を学習する方法について取り上げ、具体的な授業内容を提示する。

英語教育の中での異文化コミュニケーション教育

最近のコミュニケーション教育に関する神田外語大学の調査でも、将来必要と考えられているコミュニケーション科目の中では異文化コミュニケーション論が31.0%と最も多く、次いで国際コミュニケーション25.3%、コミュニケーション概論22.8%となっている¹⁾。確かに最近の大学英語テキストの中でも、文化論、比較文化論、コミュニケーション論に関係するものの種類が豊富になってきていることから、語学教育における異文化コミュニケーションに対する高い必要性を伺うことができる。

しかし、その教授法となると、まだ研究が浅く、どのように教えていくべきか試行錯誤の状態である。

特にコミュニケーション論、異文化コミュニケーション論といったゼミや一般講義と違って、語学の中に位置付けられた「異文化コミュニケーション」の場合、異文化コミュニケーションの「内容理解」と「英語力向上」という二つの目的を授業で果たさなければならない。その場その場で異文化理解の教材を提示するのでは内容理解についても英語力の習得についても学習効果はあがらない。より体系的に学習者の興味を引き出しつつ教材を使っていく必要がある。実際の授業の方法を示す前に、本論での教材としてステレオタイプの学習を取り上げるので、まずステレオタイプ理解の重要性について述べる。

ステレオタイプ理解の重要性

異文化コミュニケーション学習の目的は、文化の異なる人々の効果的なコミュニケーションを実行する力を養うことである。ステレオタイプは他の社会、文化のメンバーについて、ある社会、文化のメンバーによって広範に受けいられている固定的、画一的な観念、イメージである。

なぜこのステレオタイプの学習が重要なのかというと、このステレオタイプが個人の特異性を無視し、極端に単純化や誇張化がなされたものであり、相手を個人として尊重した信頼関係を築く上での障害になるからである。そしてこのような危険性をもつステレオタイプを誰しもがもつ可能性があり、多くの場合そのことに気づいていないのである。ステレオタイプの発生は、「不確定要素縮小理論(uncertainty reduction theory)」によって説明されるが、それは

人間が自分の周りの複雑な未知の外界に対して不安を覚え、その不確かさを少しでも減らそうと、今までに持っている情報をもとに分類し (categorize)、推測しようとする傾向にある。この人間の傾向は誰もがもつものであり、このステレオタイプが一つの集団によって他の集団についてのイメージとして共有されるとき、異文化コミュニケーションの障害となるのである。Barna氏はこのステレオタイプを異文化コミュニケーションの四つ目の障害としてあげている。

Stereotypes are stumbling blocks for communicators because they interfere with objective viewing of stimuli - the sensitive search for cues to guide the imagination toward the other person's reality. Stereotypes are not easy to overcome in ourselves or to correct in others, even with the presentation of evidence. They persist because they are firmly established as myths or truisms by one's own national culture and because they sometimes rationalize prejudices²⁾.

更に、ステレオタイプに感情的側面が加わると偏見と結び付き、「自文化至上主義 (ethnocentrism)」な態度へと繋がる危険性もはらんでいる。

このステレオタイプという言葉についての学生の理解度は驚く程低い。学生に授業前に異文化コミュニケーションに関する用語の定義を幾つか書かせたら、ステレオタイプについては、クラスの5パーセントの者しか (35名のクラスで1、2名) 正しく書けなかった。本研究では異文化理解の上で重要性の高いステレオタイプとはどういうものか、どのようなメカニズムでなりたち、私たちの行動にどのような影響を与えているかを、多角的かつ体系的に教える授業方法を提示する。授業は、語学教育 (英語科) のクラスにおける異文化コミュニケーション授業である。ステレオタイプの授業は、通年の週二回の授業の前期に行われた。

授業の目的

授業の目的は、以下のように決めた。

- 1 ステレオタイプとは何かを理解する。
- 2 ステレオタイプは何故起こるのかそのメカニズムを理解する。
- 3 自分たちはどのようなステレオタイプを持っているか知る。
- 4 自分たちのステレオタイプが自分たちの行動、また相手の行動にどう影響を与えるかを知る。
- 5 社会においてどのようなステレオタイプが存在し、どのような問題がおこっているのか知る。
- 6 ステレオタイプを最小限にし、よりよいコミュニケーションを取るには何が必要かを考える。
- 7 ステレオタイプの障害を取り除き異文化コミュニケーションに生かすためにはどのような態度が必要かを知る。

認識学習と体験学習

異文化学習方法には大きく分けて認識学習と体験学習がある。認識学習とは、学習者が与えられた素材を理解することによって学習する方法で、コミュニケーションに関するテキストを読む、あるいは講義を聴くという方法がこの学習法に含まれる。従来の英語教育では、テキストを読んで文法解説、訳読指導の認識学習が主流となっていたといえよう。

一方、体験学習とは学習者が自ら経験し自分の学習にも積極的に関わっていく方法である。体験学習には、ケーススタディ、フィルムやスライド、ロールプレイ、シミュレーション、ゲームなどが含まれる。体験学習は、学習者が何らかのアクティビティなどの体験をし、自分の行動や感情を客観的に分析し、その分析から役立つ概念を抽出し、そして自ら現実の状況に適用していくことである。体験学習が従来の認識学習と異なるところは、体験を通しての学習であること、そして、学習者主体の学習であるということである。企業や一般社会人向けの異文化トレーニングでは、体験的アプローチの重要性が認識され、かなり広くなされてきているが、大学の

英語教育における実施例は多くはない。それは英語クラスの学生人数が多いなどの大学の構造上の問題、教師の認識がなされていないこと、また、どのように体験学習を取り入れていくと効果的なのかよくわからないという情報不足の問題がある。

学習者が、ある概念を学ぶのに一つの方法にのみ頼るのでなく、複数の方法を用いて多面的に学習するほうが望ましい。実際クラスには、様々な学習スタイルを持った学生がいることを考えると、一つの教材を理解させるためには複数の方法を組み合わせるのが良いと考えられる。例えば、異文化研究者のKolbは学習者の学習スタイルを主に四つに分類した³⁾。「具体的学習 (Concrete)」、「分析的学習 (Reflective)」、「抽象的学習 (Abstract)」、「応用学習 (Active)」である。「具体的学習 (Concrete)」は「経験」によって学ぶこと、「分析的学習 (Reflective)」は「観察」によって学ぶこと、「抽象的学習 (Abstract)」は「抽象概念」によって理解すること、「応用学習 (Active)」は、「実験・応用」によって学ぶことである。どの学び方が適しているかは個人によって異なるため教師は様々な学習スタイルを用いる必要があるとしている。では、どのように組み合わせれば良いのであろうか。

四つの学習スタイルを組み入れた授業モデル — Cafferyのモデル —

Kolbの学習スタイルに基づきCafferyは異文化トレーニングに応用し、「経験 (Experience)」、「加工 (Process)」、「一般化 (Generalization)」、「概念化 (Application)」の四つのプロセスを示した。(図-1 参照) ⁴⁾

(I)「経験 (Experience)」はKolbの「Concrete」に対応し実際に具体的な事例を通して経験することである。

(II)「分析 (Process)」はKolbの「Reflective」に対応し実際に行われたアクティビティーを振り返り教師の指導のもとで何が起こったか、どんなことを感じたか、何故感じたかを、一人またはグループで反省、分析する過程である。

(III)「一般化 (Generalization)」はKolbの「Abstract」に対応し、上記1と2の過程から結論や一般的な原則を抽出する過程である。

(IV)「応用 (Application)」はKolbの「Active」に対応し、これまでの過程から得られた結論や原則を、実際に将来の行動に適用していく。

Cafferyのモデルは、異文化トレーニングのワークショップに基づいているため、実際の大学の授業にすぐ適用できるとは限らない。ワークショップは一日あるいは二、三日、長いもので一週間だが、一日の時間数は長い。実際の大学の授業では、半年間ないし一年間と続くが、一回の授業時間数はたいてい90分である。従って、これらの四つの過程を一回の授業で完成することは難しい。そのようなことも考慮して、授業内容によっては、複数のアクティビティーを終えて（分析は各アクティビティーの後で行う）、一般化や応用の過程をまとめて行うこともできよう。しかし、全体の流れとして現在どの過程にあるかをおさえておくと、教師は授業の流れをどの方向へ進めて行くべきなのか確認でき、どの過程にもっと時間を割くべきなのか考えることができる。

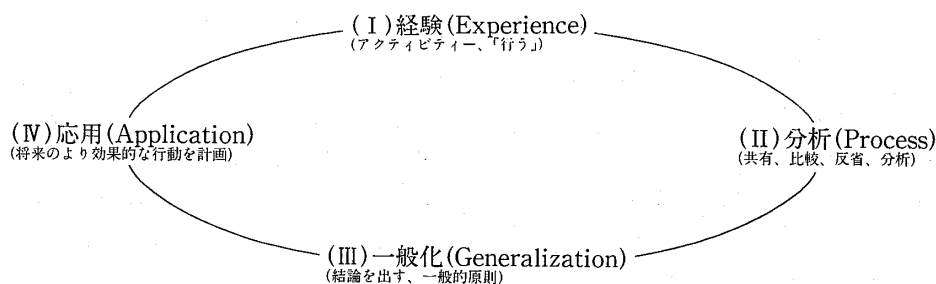


図-1 注) この図はCafferyのモデルに基づく

表-1

学習 ([] は授業の順番)	学習目標	英語スキル
(I) 経験を中心とした学習		
外国イメージについて外国人ゲストとの話合い [1]	外国について自分が持つステレオタイプの正確さを知る	speaking listening
ゲーム “Prediction and Perception” [2]	自分のステレオタイプ行動について知る	speaking listening
ビデオ “Blue Eyes & Brown Eyes” [5]	ステレオタイプを最小限にし、コミュニケーションをよくすることを考える	writing
ビデオ “Days of Waiting” [6]	社会に存在するステレオタイプを知る	writing
(II) 分析、(III) 一般化を中心とした学習		
ステレオタイプのメカニズムについて講義 [3]	ステレオタイプとは何か、メカニズムについて知る	reading
テキスト “Self-fulfilling Stereotypes” 講読 [4]	ステレオタイプのメカニズムについて知る	reading
(IV) 応用を中心とした学習		
ステレオタイプレポート「身近にあるステレオタイプ行動から学ぶこと」[7]	ステレオタイプを取り除き異文化コミュニケーションをどのようにとるべきか考える	writing

体験学習と認識学習を折り込んだステレオタイプの授業例

Cafferyのモデルの四つの過程について、ステレオタイプ学習を進めて行く上での具体例と、学習目標、学ぶ英語スキルをまとめたものが表-1である。ここでは、それぞれの学習方法について具体的に述べていく。角括弧で示した番号は授業の順番を示し、これに従って記述していくことにする。

経験を中心とした学習

[1] 外国イメージについて外国人ゲストとの話合い

外国人をゲストに招くということは、学生にとって外国人と直接英語でコミュニケーションをとるよい機会になると共に、異文化理解を助ける上で非常に役に立つ。

授業の方法は次の手順で行う。まず、外国人ゲストが来る前の授業で、現在学生がその国について持っているイメージを書かせ、次の授業までに教師がまとめてプリントにする。当日、そのプリントのイメージをもとに、外国人ゲストにそのイメージが正しいかどうか説明してもらう((I)「経験」)。ゲストとの授業からその国についての自分のイメージの

正しさについてまとめ、学んだことを書いて提出する((II)「分析」)。

ステレオタイプの学習をする上で、最初のステージ(ステレオタイプについての学んでいるという実感や先入観がないうち)に、このアクティビティをすると外国についての学生の最もストレートで素直なイメージが出てくるし、それだけゲストの説明から自分のステレオタイプの間違いを直に経験することがことができる。例えばインドネシアの大学生をゲストとして迎えたとき、学生の書いたインドネシアのイメージとして多かったものは“hot”, “poor”, “dark skin” などであった。しかし、ゲストの説明によると“hot”とはいっても、蒸し暑さの点から日本の方が暑いと感じることもあり、また、インドネシアの山岳の方は涼しいということであった。“poor”というイメージについて、ゲストは貧富の差をあげ、インドネシアの富豪は、日本の金持ちとは比べものにならない程立派なプール付きの家で広い領土をもっていると、実際インドネシアの富豪の家の写真を見せてくれた。また“貧しい”と言っても、単に日本人は我々に物を売ってお金を持っているだけであり、お金をもっていない我々の生活が貧しいとはいえないと、生活の質について考えさせるコメントもあった。また、“dark skin”というイメージについては、実際ゲストの肌の色も日本人と同じであった

が、ほとんど日本人と同じ肌の色と変わらないと説明してくれた。但し、海側の人々の中には日に焼けて黒い人もおり、中には肌の色の濃い民族もいる、ということであった。外国人ゲストとの直接の出会い、学生自身の感想から、自分たちの固定観念がいかに単純で間違っていたか、衝撃を受けた人が多かった。間違った固定観念を是正するためにも、地道ではあるが、外国人との直接出会いの場を設けることは、異文化理解のために必要なことであろう。

[2] ゲーム “Prediction and Perception”

このゲームは、異文化トレーニングの目的でDavid Hoopesが考案したオリジナルをもとに筆者が作成したものである⁵⁾。コミュニケーションにおいて相手の十分な情報が得られない状況の中で、どの様に自分がその相手を判断しているか、どのようなステレオタイプを用いているかを知るアクティビティーである。

クラスで一人、ステレオタイプの対象になる人を選ぶ。授業で外国人ゲストを招く時には外国人ゲストに対象になってもらう。無理な場合は、教師自身になるか、あるいはクラスから学生を一人選ぶ（教師か学生になる場合、あまりお互い知らない学期の始めに行うのがよい）。グループあるいは、クラスで、対象になった人について三つの質問を英語でし、本人に答えてもらう。（本番の質問と同じ質問や似ているものは、もう一度質問し直す。）その答えをヒントに、各グループでその人について次の項目について話し合いながら予測する。答えは用紙に英語で記入する（資料1参照）。1. 年齢、2. 父親と母親の職業、3. 趣味、4. 日本についての印象（外国人ゲストの場合）、5. 次のような状況におかれたらどのような行動をとるか、（1）突然解雇された場合、（2）日本人の異性にデートを申し込まれた場合、（3）エイズに感染した場合。これらの項目についてグループでの話し合いが終わったら、対象となった人に各グループに回ってもらい、グループの答えを英語で発表する。（各グループのやりとりでは、対象になった人は、正解をふせておきグループの答えを聞くだけにとどめる）（Ⅰ）「経験」。全グループを回ったら本人にクラスで正解を発表してもらい、一番正解の多かったグループを発表してもらう。その正解を聞いてから、このアクティビティーを振り返り、各々

資料-1

Prediction and Perception

I. Write three questions to the guest and write his/her answers to the questions.

Questions	Answer
1. _____	_____
2. _____	_____
3. _____	_____

II. Write down your group's judgment about the guest as to:

1. Age
2. Profession of father and mother
3. Recreation preferences (sports, music, etc.)
4. Impression of Japan and Japanese people

5. Actions the guest would take in the circumstances:

- (1) Being fired arbitrarily from a job.
- (2) Being asked for a date by a very attractive Japanese boy or girl.
- (3) Being infected with AIDS virus.

III. Reflexion/Discussion

1. How accurate were the predictions and perceptions?

2. Did any stereotyping occur? What information or cues were used to form judgments or to make predictions?

分析をする（プリント後半のReflection/Discussion）。自分たちの予測した答えがどれだけ正解であったか、それぞれの答えを推測したときにどのようなステレオタイプが起こったか振り返り分析する（Ⅱ）「分析」。

学生は、Reflection/Discussionで、自分の推測が正しかったかどうかを反省することによって、自分が過去に積み上げてきたステレオタイプ情報がどのように有効であり、また有効でないかを確認することになる。例えば、外国人の年齢は特にわかりにくく、今までの経験としての日本人の情報が適用できない。学生はゲストの年齢を、特に欧米人の場合、高く見積もりがちで、“We predicted that his age was 23, but he was actually 19 years old.” という場合がよくある。いかに自分のステレオタイプが外国人とのコミュニケーションでは役に立たないかが発見できる。また多くの学生が自分のもっているステレオタイプに気づかされる。学生の間でゲストの母親の職業を推測する時、女性であるからといってまず「主婦」や「看護婦」がよくあがるが、明らかに性に関するステレオタイプが存在している。この

アクティビティーを体験することにより、自分の無意識下におかれているステレオタイプが浮び上がって行く過程で、学生は自分の過去の経験がいかに狭く偏っており、それを基に人を判断する基準を作っていることに気づくことになる。ステレオタイプの学習の導入としてはふさわしいアクティビティーといえよう。

[3]ステレオタイプのメカニズムについて講義

[1]と[2]のアクティビティーを通して学生は実際に自分たちのもっているステレオタイプ行動について経験するが、各々のアクティビティーの後に、ステレオタイプとは何か、何故起こるのか、学生の経験を聞き出しながら考えていき((II)分析)、そのメカニズムの理解を深めていく。

ステレオタイプのメカニズムを説明するとき、コミュニケーションの理論の一つ“uncertainty reduction theory”との関連で行う必要がある((III)一般化)。人間は人とコミュニケーションをとる時、無意識ではあるが、相手がどのような人であるか、自分の過去の経験に基づいて推測・判断している。その判断に基づいて、コミュニケーションの内容や言葉使いを選んでいる。相手がどのような人であるのかわからない「未知」の部分を、少しでも減らしたいと願っているからだ。それは人間が本来もつ「未知への恐れ」と「不確定要素を縮小していこうとする傾向(uncertainty reduction)」からきている。そのために、人間は無意識に自分なりの経験に基づきステレオタイプを多種多様な形で形成し、未知の外界を自分なりにとらえ、人とコミュニケーションしようとする。ステレオタイプがないと、人間は未知の人とコミュニケーションをとることができないといえる。

このようにステレオタイプは有効でもあるが同時に、危険性があることに特に重点をおかねばならない。異文化のコミュニケーションにおいて、外国についてのステレオタイプを形成する基になる情報の多くがマスメディアからのものであり、そのメディアからの情報量と質の問題についても考えて行く必要がある。メディアによって報道されているニュースは、世界中の数多くの中より、記者が視聴者の興味や必要性に考えて選び、提供されている。そして、報道される内容は、ステレオタイプを強化する

方向に動きやすい。それは、報道の効率性を考え、ステレオタイプに合致するニュースは、余計な説明がいらないため、報道時間や紙面を節約できるからである⁶⁾。受け手としてのわれわれが、メディアの客観性や真実性に批判の目をもって臨む姿勢が必要で、自分のステレオタイプにあう報道のみでなく、ステレオタイプに合致しない報道についても目を向けていく必要性を授業で示すことが大切である。

[4]テキスト“Self-fulfilling Stereotypes”講読⁷⁾

このエッセイは、英語テキスト“The Language of Persuasion: Ten Essays from Psychology Today”の一部である。著者のSteve Cousinsが近年の月刊誌Psychology Todayより、人間のコミュニケーションと心理のメカニズムについて書いたものをまとめ、大学用の英語テキスト用(中級レベル)に編集したものである。その最終エッセイ“Self-fulfilling Stereotypes”では、ステレオタイプに関する米国での様々な興味深い実験内容が紹介されており、ステレオタイプが人間の心理や行動にどのような影響を与えるかよくまとめている。例えば、外見の魅力について、我々は容姿の魅力的な人に対しては好意的に接し、性格も親しみやすく魅力的だとみなす傾向がある。容姿に対するステレオタイプである。また、性や人種に関するステレオタイプでは、社会における女性や有色人種に対するステレオタイプが彼らをより不利な立場へと追いやっていることを示唆する実験が紹介されている。また学校や職場でのステレオタイプでは、教える側が、教えられる者について「優秀だ」と言うステレオタイプを持つと、教えられる側はそれを知らずとも成績や仕事の成果をあげるという実験などである。周囲のステレオタイプがいかに自分の能力を伸ばす、あるいは、追い込むことになるかよくわかる実験である。

このテキストは、いかに人間がステレオタイプの影響を受け、その犠牲になったり、恩恵を受けたりしているかを示している。また社会においてはどのようなステレオタイプが存在し、どのような問題がおこっているのか、そして人間がステレオタイプを容認し強化する方向へはいきやすくても、その間違いを是正していくことがいかに難しいかを教えている(前の授業目的の項目4、5、6にあたる)。このテキストを読むことによって、学生は今までのアク

ティビティーを通しての自分なりのステレオタイプの理解をより深め、そのメカニズムについて一般原則を導き出すことができる ((Ⅲ) 一般化)。

[5] ビデオ “Blue Eyes & Brown Eyes”⁸⁾

このビデオは、米国の小学校で三十年前に行われた、人種差別についての三日間の実験授業をドキュメンタリーにしたものである。人種差別をする、またはされる気持ちとはどういうものか、子供に体験させる実験である。このビデオは教育用としてはかなり有名なもので、全米で繰返し学校や研修機関で上映されている。日本でも教育用として使われたり、最近NHKでも一般に放映されたりした。内容は、小学校三年生のクラスで (このクラスは全員が白人のクラスである)、ある日担任が、クラスの生徒を青い目、茶色い目に分け、一日目は「青い目の子は茶色い目の子より頭がよいし優れている。」といい、茶色い目の子には黒い襟をつけさせる。茶色い目の子は青い目の子と遊んではいけない、水飲み場は使ってはならない、休み時間は青い目の子より五分短い、と差別される。授業でも茶色い目の子が間違えると、「やっぱり茶色い目の子は青い目の子に比べてできない。」と徹底的に差別される。五分とたたないうちに、なごやかだったクラスの雰囲気が一変する。青い目の子は茶色い目の子を「茶色い目」とからかって、けんかがおこる。休み時間に、昨日まで仲のよかった青い目の子と遊ばなくて、茶色い目の子ですり泣きを始める子がいる。優劣をつけられて陰湿な雰囲気となる。その翌日、担任の先生が「実は昨日のことは間違いだった。実は茶色い目の子の方が青い目の子より頭がよいし優れている。」といい、茶色い目の子の黒い襟を取らせて青い目の子につけさせる。前日小さくなっていた茶色い目の子は、優越感で威張ったような顔になり前日と逆のことがおきる。簡単なテストを行うと、優れているといわれた方の子の結果はよく、劣っているといわれた方の成績は低くなる。子供たちは黒い襟のせいだと言う。三日目、先生は差別された気持ちについて子供たちと話し合い、差別されている側の人々の立場を考えさせる。黒い襟を捨て、再び仲良しになった喜びに満ち、二度と目の色や肌の色で人を差別をしてはいけない、しない、と誓いあう。この体験は生徒一人一人に強烈に残り、三十年たった後も忘れず、今の

彼等の人種差別に対する基本の姿勢になっているという。

大学の授業では、このドキュメンタリーを通じて学生は「差別」を疑似体験する ((Ⅰ) 「経験」)。このビデオの視聴直後、それぞれの感動や考えが新鮮なうちに、何も話さず今の思いを紙に書かせる ((Ⅱ) 「分析—単独」)。十五分から二十分位たってそれぞれが気持ちを整理し終わったころ、クラスであるいはグループで話し合う ((Ⅱ) 「分析—グループ」)。話し合いでは、今まで学習してきたステレオタイプの知識やそれに関する一般原則と、実際ビデオで報告されたこととを結び付け、(Ⅲ)の一般化のプロセスを強化していくことが必要であろう。人種差別はステレオタイプに加え否定的な感情や偏見が加わったものであるが、それが、小学生の年齢でいかに簡単に形成され、コミュニケーションを阻むことになるかが理解できる。また、ドキュメンタリーにおいてクラスで優秀だとされた目の色の生徒のテスト結果が、劣っているとされた目の色の生徒たちよりもよかったという結果は、テキスト “Self-fulfilling Stereotypes” での「周囲の自分に対するステレオタイプによって、自己像や能力発輝度が影響される」という一般原則を証明している ((Ⅲ) 一般化)。

さらに、(Ⅳ)の応用の段階として日本の教育について考えさせる事も可能である。ある学生から指摘があったが、ビデオのような衝撃的な実験方法は、一つ間違えると生徒達を傷つけることになるし、また、比較的自分の意見や感情を表わさない日本の子供達に同じ様な実験を行ったところで、同じように成果をあげるとは限らない。しかし、人種差別はできるだけ早い学童の時期に適切な教育をする必要があると言うことは、多くの学生も感じたようである。人種差別は、現在、日本で社会問題化しているいじめにも通じることがある。両者とも弱者を作り出し、自ら優越感を感じることで自分を保ち自己達成するという点で共通なのである。非常にインパクトの強いビデオであるだけに、学生の感想や意見も比較的でやすく、(Ⅲ)一般化、(Ⅳ)応用のプロセスへと発展させていくのによい教材だといえよう。

[6] ビデオ “Days of Waiting”⁹⁾

“Blue Eyes & Brown Eyes” が小学校での人種差別教育をレポートしたものに対して、このビデオ

は、現実の社会問題として有色人種への差別の問題を扱っている。第二次世界大戦中、エステル(Estelle)という白人女性が、日本人男性と結婚し、夫が日系人収容所に入れられる際、夫と共に収容所で暮らすことを決意する。苦しい収容所での生活の中、彼女は明るく生きようとバンドに入ったり、新聞を発行したり、また収容所での人々の暮らしをスケッチする。終戦を迎え収容所から解放されたものの、日本人は冷やかな世間の目の中、条件の悪い仕事しかなく貧困の生活をおくる。エステルの夫は、そのようなストレスの中で間もなく亡くなり、彼女は毎日泣きながら星空ばかり見て暮らす。しかし、悲しみの中彼女が収容所で描いたスケッチが公開されることとなり、それがきっかけで、このドキュメンタリー映画の監督スティーブン・オカザキ氏と出会い、彼女と夫とのストーリーを自ら語ることで救われる。

日系アメリカ人が大戦中収容所に入れられたということは、日本人として重要な歴史的事実であるにもかかわらず、学生の多くは知らない。多少とも現代史について知識のある者でもこのドキュメント映画で語られているほど、悲惨であったとは知らないことが多い。この映画を通して、学生は同じ日本人が、自由・平等を謳った米国でいじめられる人種差別を受けた、ということを知り、差別される側の立場を疑似体験する((I)経験)。ビデオ視聴後、“Blue Eyes & Brown Eyes”の項で書いたと同様、学生に感想を書かせ話し合いをさせる((II)「分析」)。この事件は、歴史的な事象ではあるが、日本も、同じ様にアジアの国々に対して差別をし加害者となった。今だにその保障や謝罪のあり方でアジアの国々との間で問題になっていること、また、世界各地で民族間の紛争が異文化の問題であることから、

人種問題を過去から現在へ結び付けさせる。さらに人種差別に対して自分たちの問題とし、自分たちができることや社会で必要な取り組みについて考えさせる((IV)応用)。一つの英作文のアクティビティーとして、このビデオの制作・監督スティーブン・オカザキ氏へ、自分たちの感想を手紙にして送るという設定で、英文を書かせるのもよいだろう。

[7]ステレオタイプレポート「身近にあるステレオタイプ行動から学ぶこと」

学期末レポートとして、半年間学んだステレオタイプ、偏見、人種差別について、作成させる。これは、Cafferyのモデルの(III)「一般化」と(IV)「応用」のプロセスを中心とした作業となる。

レポート課題については、(III)「一般化」を中心とした課題と(IV)「応用」を中心とした課題の二つを取り上げた。一つ目は、(III)「一般化」を中心とした課題で、授業で学んだステレオタイプ、偏見について、自分たちの理解を示す(資料2-課題(1))。二つ目は、(IV)「応用」を中心とした課題で、自分たちの生活の中での、ステレオタイプあるいは偏見の例を五つあげ、どのようにそのステレオタイプが出来上がったのか分析する(資料2-課題(2))。なお、レポートを全部英語で書かせるかどうかは、学生の英語力を判断する必要がある。全課題を英語で書くのが難しいと判断される場合、課題(1)のみを日本語とするというような考慮もできよう。課題(1)の方が、複雑な思考を伴うからである。課題(2)ではステレオタイプの例とその説明というように、書く内容が比較的明確であるため英語で書く方が望ましい。

このレポートを書くことによって、ステレオタイ

資料-2

Report on Stereotype

- (1) Show your understanding on stereotype and prejudice you learned in the classroom activities. (Japanese student's images of the guest speaker's country, prediction and perception exercise, reading, and video films.)
- (2) Apply what you learned about stereotypes to your real life.
 - a. Find five examples of subtle stereotyping or prejudicing in your own or other people's behaviors, television, or movies.
 - b. Explain how the stereotypes or prejudices have developed.

プについての理解が各々自分のものとなり、実際に自分の生活を観察することによって、知識のままで終わらず、授業外にも応用できるようにした。実際、課題(2)では、学生が目からみたステレオタイプの例が豊富にでてきた。「大学生は勉強をしない」「女子高校生は口達者で金持ち」「男性は青か黒、女性は赤かピンクで表される」「外国にいる日本人は金持ち」などである。また自分自身の体験から「自分は双子の姉がいるが、いつも、双子だから同じ外見、同じ能力をもっているという目でみられる」と書いている者もいた。

結論

大学英語の授業の中で、異文化理解のための一つの主題「ステレオタイプ」について、「経験」、「分析」、「一般化」、そして「応用」の四つの過程の流れの中で、英語の基本的な四技能を身につける授業方法を具体的に示した。

学生は、半期の授業での様々な体験的なアクティビティーと、分析・内省の過程を経て、ステレオタイプや偏見のメカニズムについて一般的な原則を学ぶ。さらに、各々の体験と結び付けることによって、社会においていかに様々なステレオタイプが存在し、そしてその多くはいかに間違っているかが実感できる。学期末に書いてもらった感想で、ある学生は、「とても楽しく学習できたし、むしろこれが本当の学問の在り方だと思う。(ビデオ、ゲストスピーカー、プリントと) 無理なく、多角的に身についた。」と述べた。また、ステレオタイプの学習について、別の学生は、「ステレオタイプは怖いと思った。いつの間にか自分の中に作られてしまうものであり、自分がほとんどといっていいほど、いろいろな物事についてステレオタイプをもっているということがわかったからである。」と書いていた。異文化理解のためには、自分のもっているステレオタイプにまず気づくことが大事である。別の学生は、「今まで何気なく発言していたことに、気を使うようになった。」「報道などによって植え付けられる固定概念は相当なものだと気づき、報道をそのままのみにしないという姿勢も身についた。」と述べた。気づいてこそ、意識して自分の発言や行動をコントロールすることができるようになる。世の中からステレオタイプや偏

見はなくなっていくかもしれないが、一人一人がその事に気づき、周囲の情報を批判的に見、選択することから、異文化間のよりよいコミュニケーションとれるのだと思う。教師は、学生が単なる暗記や知識の習得に終わらず、本当の理解、身についた態度へと結び付けるよう綿密な計画性と、授業での学生の態度や興味などの反応を見抜く観察力と、必要あれば計画を修正、変更する柔軟性をもって授業を行っていく必要がある。

- 1) 古田暁、久米昭元、長谷川典子 「日本の大学に於けるコミュニケーション教育の実態調査報告Ⅱ」, pp.92-93
- 2) Barna, L. M. "Stumbling Blocks in Intercultural Communication"、p.34
- 3) Kolb's Experiential Learning Model, CCTS異文化セミナー "Teaching Intercultural Communication" workshop by Drs. Janet & Milton Bennett 資料、p.18
- 4) Caffery, J. A. "Independent effectiveness and unintended outcomes of cross-cultural orientation and training", p.231
- 5) Hoopes, D.S. & Pusch, M. D., "Teaching strategies: The methods and techniques of cross-cultural training", pp.112-113
- 6) 御堂岡潔、異文化間マスコミュニケーション、p.131
- 7) Cousins, S. , "Self-fulfilling stereotypes", *The Language of Persuasion: Ten Essays from Psychology Today*, pp.71-78.
- 8) "Blue Eyes & Brown Eyes", WGBH(USA) 制作, William Peters 校正
- 9) "Days of Waiting", Steven Okazaki制作・監督, 28 分ビデオ, 1990 ドキュメンタリー部門アカデミー賞受賞作

参考文献

浅井重紀子、1993、異文化コミュニケーションの英語教育への応用、「発信型英語教育の実践」 松田まゆみ（編）、三修社

Barna, L. M. (1988), Stumbling Blocks in Intercultural Communication, In *Intercultural Communication: A Reader*, L. Samovar & R. E. Porter (Eds.), California: Wadsworth Publishing.

Bennett, Janet & Milton. (1991) CCTS異文化セミナー “Teaching Intercultural Communication” by Drs. Janet & Milton Bennett 資料 (Nov. 15, Tokyo).

Caffery, J. A. (1993) “Independent effectiveness and unintended outcomes of cross-cultural orientation and training”, In R. Michael Page (Ed.), *Education for the Intercultural Experience*, Yarmouth, Maine: Intercultural Press.

Cousins, S. (1994) “Self-fulfilling stereotypes”, *The Language of Persuasion: Ten Essays from Psychology Today*, Tokyo: Macmillan Language House.

古田暁、久米昭元、長谷川典子、1992、「日本の大学に於けるコミュニケーション教育の実態調査報告Ⅱ」、『異文化コミュニケーション研究』4号、神戸外語大学異文化コミュニケーション研究所

Gudykunst, W.B. & Ting-Toomey, S. (1990) *Culture and Interpersonal Communication*, Newbury Park: Sage Publications.

Hoopes D.S. & Pusch, M. D. 1979, “Teaching strategies: The methods and techniques of cross-cultural training”, In M. D. Pusch (Ed.), *Multicultural Education*. New York: Intercultural Press, Inc.

石井敏、岡部朗一、久米昭元、1987、「異文化コミュ

ニケーション」古田暁監修、有斐閣選書

Kolb, David A. (1974), “On management and the learning process”, In David A. Kolb, I. M. Rubin, and J. M. McIntyre (Eds.), *Organizational Psychology: A book of readings* (2nd ed.). Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.

Kolb, David A. (1984), *Experiential Learning*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall .

川竹和夫、1988、日本のイメージ、日本放送出版協会

川竹和夫(編)、1991、異文化の中のニッポン、二期出版

御堂岡潔、1995、異文化間マスコミュニケーション、「異文化接触の心理学」渡部文夫（編）